

○新帰化植物ナタネタピラコ (新称) (浅井 康 宏) Yasuhiro ASAI: *Lapsana communis* L., a new alien plant found in Honshu

1959年5月、神奈川県藤沢市の路傍で、横浜市浅野学園長の故神田重夫氏が、一見ナタネ科の *Brassica* 属を想わせる見なれぬ一草を採集され筆者に提示された。調べて見た所、本種は欧州に広く分布する *Lapsana communis* L. (Nipplewort.) であることが判った。花のない時期では草姿など一寸、カラシナを思わせるが、花をつけたものを見て、やっと、その所属を明らかにすることが出来た。草丈 50—80 cm 許になり、上部で分岐し、淡黄色の舌花状よりなる径 8 mm 許の小頭状花を繖房状につける。葉は薄質で淡緑色を呈し、葉縁に粗鋸歯を有し、下部のものは広卵円形、上部のものは菱状楕円形或いは卵状披針形を呈し、また、根生葉は浅裂する。茎には短開出毛を密布し、特に下部において著しく、上部ではほとんど無毛となる。本種は、我国ではかつて京大の北村四郎博士が樺太、豊原に帰化せることを報じて居られるが、その他の産地については聞いていない。東大の腊葉庫には本種の外国産の標本が数枚あり、また、小倉謙博士がかって滞欧中、1929年7月に München で採集されたものが保存されて居り、充分比較することが出来た。文献によれば、ヨーロッパ各地に極めて普通の路傍の雑草であって、北アメリカにも帰化して居り、我国へは現在の交通状態より見て、多分、北米より渡来したものと考えられる。因みに欧州では以前本種を Salad として用いた由であった。なお和名は、草姿はナタネに、花はタピラコ (キク科の) に似ること因み、ナタネタピラコ (新称) と定めた。終りに、標本の閲覧その他に御世話頂いた東大原寛教授並びに小山鉄夫博士に深謝する次第である。

Lapsana communis L., Sp. Pl. 811 (1753); Kitamura in Acta. Phytotax. Geobot. 6: 136 (1937).

Nom. Jap. Natane-tabirako (nov.).

Hab. Hondo: Prov. Sagami, in waste place of Fujisawa (May 20, 1959—S. Kanda). Newly introduced from U.S.A. to Japan as an alien weed.

正 誤 (37 巻) Errata (Vol. 37)

ページ page	行 line	誤 for	正 read
34	19	IV—X	IV—IX
37	1	3 月	2 月
43	17	Sentember	September
61	10	23-421/10m	23-421/10cc
64	20	23-420/10cc	23-421/10cc
76	27	<i>implicius</i>	<i>simplicius</i>
88	7	PD.	PD-
94	33	<i>Haplogia</i>	<i>Haplozia</i>